



教授就任のご挨拶

分子生化学講座 分子医化学分野 教授 島山 鎮 次



平成16年7月1日付けをもちまして、石橋輝雄前教授の後任として生体機能学専攻分子生化学講座・分子医化学分野の教授を拝命致しました。北海道大学医学研究科の教授会の先生方ならびに医学研究科の関係者の皆様に、深く感謝し厚く御礼を申し上げます。

私のような若輩の身ながら、伝統ある教室の担当を命ぜられたことは誠に光栄であります。その責務の重大さを感じている次第であります。

現在まで北海道大学の多くの先生方から貴重な教えとご指導をいただき、基礎医学研究者としての礎を形つくるスタートラインにつくことができ、誠に感謝しております。北大医学部の学生時代には、同期とともにいくつかの基礎系研究室に出入りさせていただき、研究とは如何なるものかを拝見させていただきました。研究に対しての先生方の真摯な姿勢に感銘を受けたとともに、自分自身も研究を専門とすることに興味と憧れを心に抱かせていただきました。

私は1990年に、北海道大学医学部医学科を卒業後、同大学院医学研究科病理系博士課程に進学しました。当時の免疫科学研究所病理部門（現遺伝子病制御研究所免疫生物分野）の小野江和則教授の研究室に同期3人で進学させていただきました。大学院時代には免疫学の基礎と実験のご指導をいただき、テーマとしては免疫系細胞の活性化シグナルに関する分子論的研究をさせていただきました。その後、米国ワシントン大学（セントルイス）で、アポトーシスに関与するBcl2ファミリーのA1という分子のクローニングとノックアウトマウスの解析を行いました。その後、米国国立癌研究所（NCI）に移り、当時、酵母の遺伝学的手法を使うことが多かったユビキチン化というタンパク質分解制御の研究を、哺乳類レベ

ルで研究することにしました。ユビキチン化は、リン酸化、アセチル化などと共に、最近では少しずつ生命現象に重要なタンパク質翻訳後修飾として注目されてきている生化学反応であります。その後、細胞周期関連分子の多くがユビキチン化で発現制御されていることが明らかとなり、Cdkインヒビター-p27の研究を行ってまいりました九州大学生体防御医学研究所の中山敬一教授から、p27のユビキチン化を研究するために帰国するようにご連絡を受け、現在までユビキチン化を中心とする生化学及び細胞生物学的解析を進めてきております。

北海道大学医学部第二生化学教室は、今井陽先生、石橋輝雄先生と脂質研究で著名な先生が主宰されてきた伝統ある研究室であり、脂質研究とは少し異なった研究分野におります私が研究室を担当させていただきますので、この度第二生化学教室の歴史を勉強させていただきました。特に今井陽先生が書かれた「脂質の生化学」はちょうど私が生まれた年に出版されており、当時から深い考察力と先見の目をお持ちだったことが読みとることができました。1960年半ばにおいては「脂質の生化学は敬遠されがちで研究歴史が比較的若いために、未知の領域も極めて多かったのである。」と書かれているように、研究対象としては解析が難しく玄人的な領域であったとお察ししますが、当時からこの領域を研究していたことには敬服する次第であります。その後最近までの約20年において、プロスタグランジンの発見やシグナル伝達分子としての脂質メディエーターの役割が明らかとなり、脂質研究が生化学のなかでも重要な位置を示すに至っております。これから先代教授たちの功績に少しでも近づけますように、私自身も先見の目を持ち後世に役立つような研究をしていかなければならないと痛感しております。皆様には、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。

就任のご挨拶

循環病態学講座 循環病態内科学分野 教授 筒井 裕之



循環病態内科学講座北畠顕名誉教授の後任として平成16年9月1日付けで赴任して参りました。循環器内科は、昭和48年に全国の国立大学のなかで最初に設置されたという大変伝統のある講座であり、北海道における循環器診療のリーダーとして大きな役割を担っている診療科であります。担当させていただくにあたり、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。

私は昭和57年に九州大学を卒業後、中村元臣先生が主宰される循環器内科に入局させていただき、友池仁暢先生（現国立循環器病センター院長）さらに竹下彰先生に循環器病学の基礎と臨床について幅広く御指導いただきました。米国のGeorge Cooper教授のもとに留学中に、細胞骨格が心筋収縮を制御する機能分子であるということを見出した研究（Science1993）に従事したことが、その後の私の人生を方向付けたと思います。帰国後現在まで心不全の発生機序の解明を目的とした研究に一貫して従事してきました。最近、ミトコンドリアDNA障害に起因する酸化ストレスが心不全の形成・進展に関与することに着目し、新たな治療法を開発する研究を推進しています。近年、酸化ストレスは、ガン、糖尿病、神経疾患、肝疾患など数多くの疾患の発症に関与することが注目されており、循環器内科領域にとどまらず、幅広い領域での展開が期待されます。今後とも国内外の研究グループと共同研究体制を構築しながら、研究を推進していきたいと思っています。また、慢性心不全の臨床像・治療と予後との関連を明らかにすることを目的に、現在5000例を目標にわが国最初の全国規模での登録観察研究に取り組んでいます。

学生の臨床教育と卒後研修は、我々の責務の一つですが、私は特に「いい臨床医」を育成することが重要であると考えています。「いい臨床医」とは、基本的臨床能力が身につけているのはもちろんのことですが、患者・家族の立場に立って診断・治療を選択・実施し、他のスタッフとも円滑に業務をすすめていくことのできる人間性に優れた医師であると思います。

北海道大学病院は、周辺地域の開業医の先生や他の医療機関と密接に連携しながら北海道における医療機関の中核として機能することを期待されています。循環器診療の3つの柱は、1) 高血圧、高脂血症、糖尿病などに対する予防医療、2) 急性心筋梗塞などに対する救急医療、3) 重症心不全、難治性不整脈などに対する高度医療です。循環器内科が、循環器診療のCenter of Centerとして機能し、地域社会にさらに一層貢献していくよう取り組んでいきたいと思っております。

私は、もとより浅学非才の若輩者であり、甚だ微力でございますが、北海道大学における質の高い循環器診療の実現と研究と教育の充実にむけ専心努力いたす所存でございます。今後ともより一層の御指導と御鞭撻を賜りますよう宜しく御願い申し上げます。

私は、もとより浅学非才の若輩者であり、甚だ微力でございますが、北海道大学における質の高い循環器診療の実現と研究と教育の充実にむけ専心努力いたす所存でございます。今後ともより一層の御指導と御鞭撻を賜りますよう宜しく御願い申し上げます。

第43回医学展を終えて

実行委員長 医学科5年 中嶋 朝子

6月5日、6日と2日間に渡り開催いたしました医学展には約4千人の方々を訪れました。私たちの目標であった市民の方々との交流も、さまざまな企画を通して実現できました。現在の医療に対する思いや学生・医師に望んでいらっしゃるなどいろいろな人からお聞きすることができました。また来ていただいた方々に北大医学部をより身近に感じていただけたと思います。企画を提供している私たちが、市民の皆さんとともにその

企画を楽しみ、勉強するという貴重な体験をさせていただきました。医学展を支えていただいた全ての方々には実行委員・スタッフを代表してお礼を申し上げます。

この原稿の作成中に講演をしていただいた中島らもさんの訃報がとどきました。医学展終了後に「まだ伝えたいことがたくさんあった」とおっしゃっていました。もう2度とお聞きできなくなったことが本当に残念です。心から心からご冥福をお祈りいたします。



《高齢者・妊婦・車椅子体験実習》

当日は予想以上にたくさんの人が気軽にこの企画に参加してくださいました。身体の不自由な方大変さを身をもって感じていただき、様々な感情・感覚を持ってくれたと思います。

高齢者体験では、片麻痺擬似体験セットと白内障・視野狭窄などが体験できる眼鏡を用意しました。「バランスがとりづらい」「お年寄りの方が道の途中で休むのがよくわかる」という声が聞かれました。妊婦体験にはご家族やカップルの参加が目立ちました。妊娠8ヶ月の状態を体験してもらったのですが、経験のない人にとっては驚きだったようです。「苦しくて仰向けに寝てられない」「下が見えないので階段が怖い」などという声を聞かせていただきました。車椅子体験では、腕の力が想像以上に必要なこと、スロープやでこぼこ道を車椅子で進むのがいかに大変かを皆さん実感されたようです。



この企画を通して、身体の不自由な方の気持ちをも少しでも感じてもらい、まわりの人々たちへの理解と協力が深まることを願っています。特に、楽しそうに参加してくれた子供たちには、この経験を忘れないでほしいと思います。

(責任者：
鈴木英孝)

《講演会》

I. 講演会：国境なき医師団の活動について

講演者：国境なき医師団日本理事 白井律郎

II. 交流会：医文化交流しませんか？

— 家庭医・法医が、お答えします —

講演者：北大医学部社会医学専攻

法医学分野教授 寺沢浩一

プライマリ・ケア医学分野教授 前沢政次

白井先生の講演会では学部生の参加が目立ちました。

他にも、海外における活動に関心のある方がたくさんいらっしゃいました。使用されたスライドはほとんどが英語で書かれたものでしたが、後半には質問が相次ぎました。「医師団に参加した後、日本に戻ってきて仕事はあるか」など具体的な内容が多く、海外での活動に対する学生の関心の深さを感じました。

寺沢先生・前沢先生による交流会でも活発な質疑応答が交わされました。和やかな雰囲気の中にも、皆さんの健康に対する不安や医療への疑問が表れていました。学部生が客席の方に向けて質問するといった場面も見られ、学生も一般の人とのコミュニケーションを求めていることがわかりうれしく思いました。

(責任者：下田祐介)



《献血》

6日(土)のみで、予想を大きく上回る約140人の方に献血をしていただきました。事前にポスターなどをいろいろな場所に持っていき、貼りまくった甲斐がありました。血液センターの方もたいへん喜んでおられました。輸血が必要な方の助けになることができたと考えています。(責任者：下田祐介)

《市民と医学生による検査体験会》

問診、眼科、神経内科、心電図、エコー、呼吸器、体験の七部門を配置しました。総勢850名以上の方々に



ご来場いただき大盛況でした。どの部門にも、興味深げに、また楽しそうに検査を受けられる市民の方々を拝見することができました。市民の方からの質問に真剣に対応する学生の姿も見られて、全体的にあたたかな雰囲気の検査体験会だったと思います。

来場された方はお子さんからご年配の方まで、様々な年齢の方々がいらっしゃいました。特に子供たちには、医者体験、肺活量コンテストや握力ランキングなど、実際に見たり触ったりできるものやクイズ感覚で楽しめるものなどが大好評でした。聴診器で心臓の音を聞いて驚いたり、肺活量コンテストで頑張って息をはいたりして喜んでいる姿も見受けられました。たくさんの市民の方々とお話し、交流できたことをうれしく思います。私たちも楽しんで体験会を行うことができました。来場された方々には、今後の参考としてアンケートを書いていただきました。その中で、「楽しかったので、また来年も来たいと思います」「来年も体験会を楽しみにしています」というようなご感想を多く頂きました。多くの方々に楽しんでいただき、この体験会は大成功だったと思います。「学生の誠実さを感じました。がんばってすてきな医者さんになってください」とのお言葉もいくつかいただきました。この言葉は本当に本当にうれしく思いました。これから医学を学ぶ上で、大きな励みとなる体験会でした。（責任者：川崎いくみ）

《救急》

「体験してもらうこと」を基本に、救命・外科医体験、救急医療器具の展示、講演会、救急車の設置などの企画を用意しました。かなりたくさんの方が訪れ、喜んでいただけたと思います。

最も好評だったのは外科医体験コーナーでした。ここでは外科医の扮装をして写真撮影をし、プリントアウトして差し上げましたが、待っている人の長い列ができました。まわりには気管挿管用のチューブや喉頭鏡などを展示し、実際に触ってもらえるようにしました。初めて

見るといふ人がほとんどで、特に子供たちには好評でした。練習用の人形を使って心肺蘇生を体験できるようにしたのも喜ばれました。この日のために勉強や練習を重ねてきましたが、一般の人たちに上手く教えるのはとても大変で、知識不足を実感しました。

講演会のはじめに学生による寸劇をし、北大救急部の医師と北消防署から来ていただいた救急救命士による講演会、そして人形を使った心肺蘇生の体験会という構成でした。2回の講演会には計100人ほどの人たちが集まってくださいました。体験では学生が教えるという形でしたが、私たちの力不足で、一般の方々と一緒に取り組むようになってしまいました。学生も一般の人も一生懸命でした。

救急救命士の方々はもしもの時のために救急車で北大に来られました。講演会の間は救急車を医学部前に停めて、車内を見学できるようにしていただきました。医学展に立ち寄った人たちが、たくさん見学されたようです。

医学展を通して、救急ということだけでなく、医療に対する人々の関心の高さをとても感じました。それに少しでも答えることができたことを、本当にうれしく思います。そしてもっと気軽に器具に触れたり、専門家のお話を聞いて、医療を身近に感じられる機会が必要だと感じました。（責任者：坂本 壮）



《テーマ企画》

1. 「性感染症」

① 講演：危険を知らない若者たち

—若者の性行動と性感染症—

講演者：北大病院看護部副看護師長 大野稔子

② ワークショップ：恥性から知性へ

—大事な大事な、お話です—

ゲスト：内田春菊（漫画家）

③ HIV抗体検査

「性感染症」北大病院副看護師長の 大野稔子さん、漫画家兼女優の内田春菊さんを招きました。大野さんからは

HIV感染の広がりの実態や医療の現場からの報告と、感染しないためのアドバイスをさせていただきました。内田さんをご家庭で性に関する話をなにも隠さず子供たちに話しておられることや、子供を性的な言葉や暴力から守ることの大切さなど、幅広い講演をされました。ワークショップではクイズや学生からの質問を中心にして、会場の人々も積極的に参加されました。活発なディスカッションがあり、いろいろな意見が飛び交いました。性教育をもっともっと大切に考えていかなければならないと痛感しました。

HIV抗体検査では2時間という短い時間の中、約30人の方が採血をされました。気軽に検査を受けられる場を提供できたことがよかったですと思います。

II. 「依存症」

① 講演：依存症への理解と回避

講演者：中島らも（作家）

② 講演：依存症とは、どのようなものか

講演者：北海道立精神保健福祉センター

保健福祉推進部長 田辺 等

実際に薬物を経験した中島らもさんからのお話は圧巻でした。たくさんの方が会場に集まりました。特に若い人たちが多く、中島さんも会場の人たちにアドバイスをしようとお話されました。会場が暑く息苦しい中、皆さん最後まで熱心に講演を聞いていらっしゃいました。最後に1曲歌われ、中島さんの優しい気持ちが伝わってきました。

精神科医である田辺先生の講演会は、実際に薬物依



存と戦っている方からのアピールもあるなど、講演者と客席の距離がとても近い、和やかなものでした。2つの講演のバランスがよく、全体にリラックスした雰囲気の中で、薬物依存の怖さに触れられたよい企画になったと思います。（企画責任者：下田祐介）

《盲導犬》

初夏の晴天に恵まれた医学展二日目、盲導犬デモンストレーションが正面玄関前のロータリーにて行われました。当日は、北海道盲導犬協会から訓練士の方とキャンペン犬のジャムくんが来て下さり、2回にわたるデモンストレーション（お話+体験歩行）に加え、自由に盲導犬と交流できる「ふれあいタイム」も設けて下さいました。

デモンストレーションは二回とも大盛況で、訓練士さんのお話に子供から大人まで多くの方が興味深く耳を傾けており、その後の体験歩行にも大勢の希望者が集まって下さいました。さらに、ふれあいタイムも、普段仕事ぶりを眺めるだけの盲導犬と直接触れ合うことができる貴重な機会として、多くの方に楽しんでいただけたようです。また、医学展を通して行った盲導犬協会への募金活動にもたくさんの方の善意が集まり感謝しております。全体的に、盲導犬の「かわいさ」だけでなく、目の見えない方の苦労や大変さ、そして盲導犬の仕事や役割の大切さを少しでもわかっていただけたのではと思っています。（責任者：濱岡早枝子）



第54回医系大運動会を終えて

実行委員長 医学科4年 濱野 博基

6月18日、僕ら実行委員の一年生による華麗な(?)選手宣誓のもと第54回医系大運動会が開催されました。

当日は晴れ。絶好の運動会日和でした。この運動会の日は二年連続雨で中止となっていたため、この日を迎



えられてとりあえず僕はほっとしました。この日のためにどれほど北大構内をせかせかと動き回ったことか・・・。

この役を受け継がれ、まず僕がしたことはお偉いさん方への挨拶。「今年も医系大運動会のほど当日の挨拶もかねてよろしく願います」と。西先生のところへ行ってもペコペコ。医短の松野先生のところへ行ってもペコペコ。そして教務でもペコペコ。テスト関係でこういうのは慣れてるといっても、口下手な僕にとっては過酷な仕事でした。

次に、去年みたいに運動会を雨で流してしまうようなことは絶対にしたくないと思い、僕は体育館の確保に乗り出しました。これは運良く教養の体育の授業が金曜日に入っておらず、サークル会館の係の方の協力も得て、思ったよりもすんなりといきました。体育館を借りるというのは今までになかったことで、今年運動会はちょっとちがうなあって思われたかったのですが、ま、晴れに越したことはないです。外で遊ぶのが一番！！そういう僕はアイスホッケー部なのですけどね。

そして一番大変な資金集め。医学部学生会・同窓会、医療短期大学学生会の他に医局協賛金、医学部学生と医短学生（保健学科）から学生負担金を頂いています。協賛して下さった医局は50近くまで及び、これを頂くために僕ら実行委員は学部中をまわります。運動会実行委員は毎年アイスホッケー部から成っていますが、これは何故か調べてみると、一時は参加者不足のため中止になっていた運動会を10年位前のアイスホッケー部の先輩が復活させたらしく、その流れからきているようです。

協賛金を集めている間、医局のみなさんは変な浮浪者が学部内をうろついているとお思いになったかもしれませんね。あれ、実は僕のサイバイマン（ドラゴンボール用語）です。本当にお忙しい中失礼いたしました。学生の負担金も4年にもなるとみんなしぶしぶ渡すのですね。「も〜う、わかったよ」みたいな感じで。その前に参加しましょう。勘違いしている人が多いのですけれども、運動会の日って休講じゃないのですよ。運動会は授



業の一貫なんです。ちょっとだけでもいいので足を運んでください。みなさんのその一歩で運動会がより一層盛り上がるのです。

他に仕事といたら、協賛企業の取引、レンタル用品の手配、ビアパーティーの準備、参加記念品の注文、宣伝用のポスター・プログラムの製作など数えるときりがありません。参加記念品であるウィズユーカーを注文して戻ると車がレッカーされていたり、プログラムができたのが前日ギリギリで医局に配り忘れ、教務の方に手伝って頂いたり様々なへまはやらかしましたが、そこまでして準備した運動会。必ず成功したいものがありました。授業で僕の姿を見ないと考えたクラスのヒト、僕は裏でこんな仕事をしていたのですよ。

そんな感じで運動会に突入するのですけれども、ここにきて僕の不安が的中してしまいました。それは大会参加者が圧倒的に少なかったことです。医系大運動会は医学部学生と医短学生、医局、教職員を赤・黄・青・緑の4チームに分けて行われますが、参加者の8割近くが医短学生を占めていました。しかも、緑チームが常時10人ほどしかいなかったにもかかわらず、その都度僕ら実行委員をはじめ助っ人を注入し続けた結果、優勝してしまうという珍事件まで発生してしまいました。参加者を集められなかった原因は二年連続で雨天中止だったことや僕らのPR不足など多々ありますが、一番大きかったことは今まで積極的に参加してくれた医短の1年生が医学部保健学科として教養に入ってしまったことだと思います。その意味でも大会前に松野先生がおっしゃっていたように運動会を土曜日にするというもひとつの手かもしれません。どちらにしても、これからに向けて何らかの改革が必要なことは確かです。

また、当日は暑く、参加者が競技よりもテント内で涼んだり僕らが出すかき氷に走ったりする姿が目立ちました。でも参加してくれるだけありがたいので、個人的に僕は許します。ただ、飲み残しのペットボトル、食べ残しの弁当が競技場内に散乱していたので、そこの辺は注意してほしいと思います。

この運動会には様々な意見があると思います。授業を変更してまで行う意味があるのか、経費の無駄遣いではないだろうか、などなど。でも考えてみてください。勉強だけが学校ですることですか？学校の仲間と遊べる機会などそうはありませんよ。ましてや教授、助教授、医局員や職員の方々、医短の学生を取り囲んでのイベントです。そういう交流の場がなくなったら寂しいと思いませんか？はっきりいって今の状況ですとなくなってしまうのも時間の問題かもしれません。一度なくなっている大会だけに、また潰れてしまったら再び復活することは難しいと思います。何年か後に僕らの後輩が運動会をやりたくてもできない、そんな状況をつくらせ

ないためにも僕ら実行委員は参加者を集めなくてはならないのです。そしてみなさん参加してください。

最後になってしまいましたが、この運動会のためにご支援してくださった医学部学友会・同窓会、医短学友会、各医局、様々なアドバイスを下さった教務のみなさん、当日僕ら実行委員の仕事を手伝ってくれたお手伝いさん、参加してくれた学生、本当にありがとうございました。今後も僕ら医系大運動会実行委員は新しいアイデアを持ち寄せ、工夫を凝らしていきたいと思いますので、医系大運動会の発展のためご支援のほどよろしくをお願いします。

オリンピック、甲子園、そしてFD

—第8回医学部学生教育ワークショップ報告—

病態内科学講座 呼吸器内科学分野 助手 別 役 智 子

第8回北海道大学医学部学生教育ワークショップは平成16年8月20日（金）21日（土）樺戸郡月形町「はな工房」で開催されました。参加者は教員が教務主任櫻井教授以下35名。事務員が4名でした。

バスの中から自己紹介が始まり、私と同じように、上司の命令で何も知らずに参加した先生たちが少なからずおられるのだということに内心ほっとしました。既に、参加者が5～6人ずつのグループに分けられており、さっそくグループ名を決めるようにとのお達しがありましたが、これからいったい何が始まるのか未だによくわからない状況のまま、一時間少々で会場に到着しました。

さっそく、講義。全国の医学教育改革の状況、本学における課題などを取り上げられ、また新カリキュラムについての説明もありました。今回のテーマは、「新カリキュラムの5・6年生時における臨床実習教育プログラム、選択実習（基礎医学を含む）、臨床基礎講義に関する学習プログラム」ということです。各グループのワークショップ（WS）プロジェクトのテーマは、「感染症の管理と対策」、「加齢と老化」、「医師患者関係」、「チーム医療」の4つが選ばれました。15時からワークショップ（WS）Iでそれぞれのグループに分かれての一般目標、個別行動目標づくりと早速作業が開始されました。決められた時間内で、役割分担を決め、アイデアを出し合い、パワーポイントでスライドを作成し、発表するという形式でした。この「決められた時間内に」というのがミソで、集中力を増し、意見がまとま

る非常に効率的な方法であることを改めて感じました。グループ発表、全体討論も激しく質疑が飛び交い、徐々に活気づいてきました。

そして、温泉。憧れの岸玲子教授と一緒に露天風呂。さりげなく地元の人と泉質について語られる岸先生は、テレビの温泉番組レポーターのようでした（意外な一面）。しかもなんと「カバノアナタケ湯」という知る人ぞ知るありがたいお湯。夕食に生ジョッキがつき、19時からほろ酔いディベートに突入しました。小橋元先生の名司会で「北大医学部の入学試験には受験者全員に『態度評価』を取り入れるべきである」賛成か反対かを機械的に2チームに分かれて戦いました。そもそも、ディベートの経験もなく、ルールも知らない者同士で、ほとんどお酒の勢いとノリのよさだけで盛り上がりてしまいました。しかし、厳密な判定結果は、誰もが予想しな



かった結果に。

ある基準でいくと賛成側チームの勝ち、しかし、別の基準でいくと反対側チームの勝ちと、まさしく、評価というものの難しさを身にしみて体験するという結果となり、図らずも我々が直面している問題を露呈した結末となりました。さらに場を有名どころのラーメン屋に変えて、「ラーメン屋であえてカレーを注文する変人もいる、しかし、その個性を尊重する教育の重要性」についての深い議論に花が咲きました。前沢先生ご馳走さま。さらに、時はアテネオリンピック。その夜は3つの金メダルに盛り上がり宴会は深夜まで続きました。

翌日は、駒大苫小牧高校が、甲子園準決勝。テレビをちらちらと横目に、作業は、WSIIで学習方略づくり、

さらにWSIIIの評価方法とプログラムは進んでいきました。かくして4つのカリキュラムが完成しました。実現可能性はいかに？ 最終プログラムはKJ法を用いた「北大医学部教育の問題点を整理する」そして、その解決策を提案するというものでした。このKJ法というのがミソで、単に不満やぐちのこぼしあいにならずに、我々ができることから解決策を模索するという、非常に前向きな方略を学びました。しかし、まるで申し合わせたかのように、どのグループからも「最も重要であるが、かつ最も解決が困難な問題」として「教員数の絶対的不足」という問題が提示されていたことは印象的でした。二日間、とても充実した気持ちになりました。私も当分の間、熱く教育を語る一人になるでしょう

2004年北大医学部オープンユニバーシティと体験入学の報告

医学部アドミッション委員会委員長 病態情報学講座 核医学分野 教授 玉木 長 良

恒例となった北大医学部のオープンユニバーシティおよび体験入学が今年も8月2日（月）および3日（火）の2日間で開催された。これは北大をより広く理解していただくために主に入学を希望する高校生を対象に北海道大学アドミッションセンターが毎年企画しているものである。その趣旨にそって学部毎に立案企画して、学部ごとに毎年実施している。オープンユニバーシティおよび体験入学の案内は冊子に印刷され、各方面の高等学校に配布されると共に、インターネットなどを通して広く広報され、申し込みを受け付けている。体験入学は事前の申し込み者と対象としているのに対して、オープンユニバーシティは申し込みの必要はなく当日参加ができる。

オープンユニバーシティは8月2日（月）午前と午後2回に分け、各々96名、62名で合計158名の参加者があった。特に今年は道内だけでなく道外の参加者も多く見られた。また父兄の参加も若干名あった。まず学部長から北大および北大医学部の紹介があった後、医学部で作成した医学部の案内や授業風景を紹介したビデオを閲覧した。この紹介ビデオは北大の中で医学部が率先して作成したもので、医学部内部が理解しやすいように編集されている。また少し古くなって入るが、学生参加型の先駆的な授業風景もこのビデオに収録されている。参加者は学部長のお話とこのビデオで医学部の概要を理解していただいた。その後4、5名のグループに分かれ、引率の教員に連れられて、各方面の研究や診療の現場の見



オープニングユニバーシティ：学部長



体験入学：講師は長嶋教授

学を行った。最後に質疑応答の時間を設けた。今年も例年通り質問も盛んであったが、特に法医学に関する質問が多かったのが印象的だった。これはテレビ番組などの影響を多分に受けているようである。寺沢教授が回答者として参加してくださったのはありがたかった。

翌日の体験入学では神経病理の長嶋教授が、[脳の病気をみる]と題して約1時間の間、脳の機能や病気に伴う変化についてわかりやすい講義をされた。高校生だけに脳の病気のことよりはむしろ脳の機能に関して興味が深かったようである。質問事項を事前にメモ書きして準備しており、長嶋先生は事前に準備された質問や講義の後の質問にも丁寧に答えておられた。特に脳の局所とそれぞれの機能について興味を引いたようである。57名の熱心な参加者があった。

このような活動を通して、北大がより開かれた大学と

して学内の様子を一般の方に理解していただくことが大切である。と同時により優秀な学生が北大医学部に入学してこられることを切に願う次第である。最近では大学の企画したオープンユニバーシティおよび体験入学の参加者が若干減少傾向にある。逆に個別の大学訪問が増えて担当職員がその対応に追われている。せっかく準備されたこのような企画を利用していただき、広く北大を理解していただくと共に、教員の先生方との交流を深めていただきたいものである。

最後に、ご多忙のところわかりやすい授業をしてくださった長嶋先生はじめ、学生の引率や質問に対応して下さった各教室の諸先生、さらには本企画に奔走して下さった医学部教務関係の職員の方々に厚く御礼申し上げたい。

平成16年度東日本医科学生総合体育大会

医学部医学科4年 波多野 恵
(北大医学部東医体評議員)



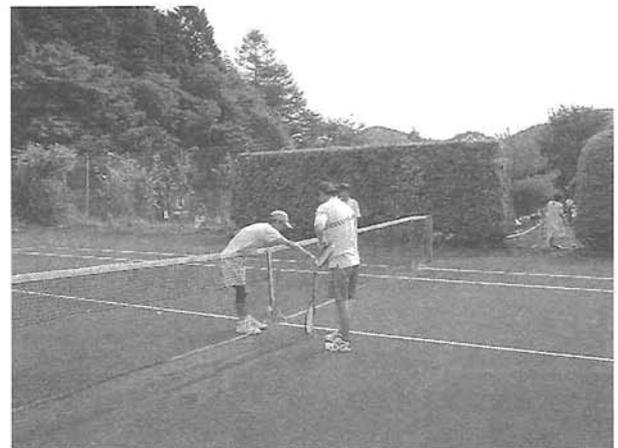
今年も7月下旬から8月中旬にかけて、第47回東日本医科学生総合体育大会夏季大会が開催されました。今年度、第47回東医体は旭川医科大学を主管代表校とし、札幌医科大学、弘前大学医学部、北海道大

学医学部の4校で主管を受け持ってまいりました。約1年前より、北海道大学医学部でも副主管校として運営部を設置し、夏季競技ではバレーボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ボートの5競技の競技主管を担当させていただきました。

東医体は参加校36校、参加者数約1万3千人という大きな大会であり、その運営は容易なものではありませんでした。自分たちの部活との両立に苦しんだこともあり

ましたが、共に仕事をしてきた仲間たちに支えられなんとか大きな問題もなく夏季部門を終えることができました。9年に1度という機会に恵まれ、運営部としてこの伝統ある東医体に携わることができたということは私達にとって本当によい経験であったと思います。至らない点も多く、関係者の皆様には多大なご迷惑をおかけしてしまったこともあったかと思いますが、本大会が一人でも多くの参加者に「参加して良かった」と感じていただけた大会であったことを願って止みません。

また、東医体という大会は学生だけでなく、OB、OGの方々や諸先生方、教務係のみなさんといった多くの関係者各位の多大なるご支援ご協力があったこそ成り



立っているということに改めて気付かされました。この場を借りて厚く御礼申し上げるとともに、今後ともご支援お願いしたいと思っております。

今年度北海道大学からは、東医体夏季大会に準硬式野球、テニス(男女)ソフトテニス(男女)卓球、バレーボール(男女)バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール、柔道、剣道、水泳(男女)ボート、ハンドボール、ゴルフの14競技、19部門に参加しました。バスケットボール部に関しましては、東医体3連覇と非常に優秀



な成績をおさめています。

なお、第47回東医体は冬季大会を控えております。12月にアイスホッケー、3月にスキートの大会が開催され、どちらも北海道大学医学部の競技主管となっており、現在着々と準備を進めているところです。残す冬季大会も

すばらしい大会となるよう頑張っていきたいと思っております。



お知らせ

◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

◇医学部

医学部卒業試験日程

今年度の卒業試験は、9月6日(月)から11月12日(水)の期間、医学部図書館3階特別会議室で行われ、12月2日(木)には、客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination: OSCE)を実施する予定です。

なお、平成16年度卒業生については、平成17年2月10日開催の教授会(医学科会議)において決定し、翌2月11日掲示により発表する予定です。

医学部学士編入学について

平成17年度医学部医学科学士編入学試験(募集定員5人)の合格発表が9月3日(金)にあり、募集定員どおり5人の合格者を発表し、合格者全員入学手続きを完了いたしました。

[入試データ] 志願者数 292人(男196人、女96人)
第1次選抜試験7月30日(金)「生命科学総合問題」
受験者 266人(男178人、女88人)

合格者 30人(男21人、女9人)

第2次選抜試験8月19日(木)「課題論文」「面接」

受験者 25人(男18人、女7人)

最終合格者 5人(男4人、女1人)

第99回 医師国家試験のお知らせ

第99回医師国家試験の施行が官報に掲載され、試験日程が次ぎのとおり公表されました。今回の試験は、従来に比べ約1ヶ月実施日程が早くなっています。

なお、6年次学生に対する医師国家試験願書等の配付は11月10日(水)12:00から特別会議室(医学部図書館3階)で行う予定です。

出願期間:平成16年12月8日(水)~12月24日(金)

試験期日:平成17年2月19日(土)~21日(月)

合格発表:平成17年3月30日(水)午後2時

※ 詳細は

<http://www.mhlw.go.jp/general/sikaku/1.html>

の厚生労働省ホームページに掲載されています。

◇大学院

大学院博士課程入学試験

平成17年度大学院医学研究科（博士課程）の入学試験日程は、前期試験および後期試験の2回に分けて実施されております。

前期試験は、平成16年8月2日（月）から8月9日（月）までの出願期間で、9月8日（水）に実施され、合格発表は、9月17日（金）に行われました。

[入試データ]

志願者数 28人（男19人、女9人）

受験者数 "（"、"）

合格者数 "（"、"）

また、後期試験は以下のとおりです。

出願期間：平成16年12月13日（月）～20日（月）

試験日：平成16年2月2日（水）

なお、外国人留学生の場合は、翌日3日（木）に日本語試験が実施されます。

合格発表：平成16年2月25日（金）

大学院修士課程入学試験

平成17年度大学院医学研究科医科学専攻（修士課程）の入学試験は、平成16年7月26日（月）から8月2日（月）までが出願期間で、入学試験は9月6日（月）に実施され、合格発表は9月17日（金）に行われました。

[入試データ]

志願者数 53人（男25人、女28人）

受験者数 45人（男21人、女24人）

合格者数 40人（男18人、女22人）

◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

医学研究科

金額単位：千円

年度別 研究種目	14		15		16		備考
	件数	交付額	件数	交付額	件数	交付額	
地域連携推進研究費	1	21,000					15年度以降募集中止
特定領域研究	10	48,200	9	50,300	12	74,900	
基盤研究(S)	1	11,500	2	49,400	2	33,200	
基盤研究(A)	4	64,200	4	37,400	3	45,400	
基盤研究(B)	39	190,770	38	164,500	36	180,600	
基盤研究(C)	22	34,599	21	37,800	20	27,711	
萌芽研究	16	28,511	18	37,800	23	39,700	
若手研究(B)	7	12,400	8	13,299	8	15,500	
計	100	411,180	100	383,199	104	417,011	

採択率（新規・継続を含む）

14年度 37.7%

15年度 40.6%

16年度 47.3%

年度別 研究種目	14		15		16		備考
	件数	交付額	件数	交付額	件数	交付額	
特定領域研究	1	3,800					
基盤研究(B)	4	24,300	3	10,100	3	12,400	
基盤研究(C)	9	9,900	6	9,600	7	8,500	
萌芽研究	2	2,000	2	4,100	3	4,100	
若手研究(B)	4	2,900	3	3,200	5	4,500	
計	20	42,900	14	27,000	18	29,500	

※ 14年度は医療技術短期大学部としての採択状況。

採択率(新規・継続を含む)	14年度 30.5%	15年度 26.4%	16年度 34.6%
---------------	------------	------------	------------

※ 14～15年度の採択状況は最終実績。16年度は8月31日現在の採択状況です。

※ 参考までに14年度分から掲載しました。

編集後記

この夏は、駒大苫小牧が、甲子園で北海道勢として初優勝し、アテネ五輪は、日本勢のメダルラッシュに沸き、台風18号の被害は甚大で、ポプラ並木の4割が風でなぎ倒されました。

さて広報23号は、新任2教授の就任のご挨拶、第43回医学展、第54回医系大運動会、第8回医学部学生教育ワークショップ、2004年オープンユニバーシティと体験入学、と盛り沢山の内容となりました。

お忙しい中記事をお寄せいただいた執筆者の方々に、感謝申し上げます。内容充実の本号ですが、なかでも、“第43回医学展を終えて”をぜひ読んでいただきたいと思います。学生たちの熱い思いが伝わってくるようなすばらしい内容です。

(佐藤松治)

— Home Pageのご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
068-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務係 電話 011-706-5003
編集委員 澤口 俊之、安田 和則、菊田 英明
小橋 元、佐藤 松治